

短期大学生の職業意識の変化

ブライダル専門学生と司書課程学生の比較研究

(第一報)

木内 公一郎
増田 榮美

第1章 はじめに

第1節 短期大学における進路指導の現状 (増田)

第2節 専門職教育の現状

司書 (木内) ・ブライダル (増田)

第3節 職業的社会化 (木内)

第4節 研究の意義と目的 (木内)

第2章 研究の方法と調査の概要

第1節 研究の方法 (木内)

第2節 調査の概要 (増田・木内)

第3章 インタビューの分析

第1節 司書 (木内)

第2節 ブライダル (増田)

第4章 結論と今後の展望 (木内・増田)

第1章 はじめに

第1節 短期大学における進路指導の現状

いわゆるリーマンショック以降日本の経済状況は悪化し、新卒者の内定率も減少している。平成22年度短期大学新卒者の内定率は63.1%で前年同期比4.2ポイント減となっており、依然として厳しい状況が続いている（文部科学省 平成22年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査より）。また、大学全入時代を目前に控え、短期大学への進学者が減る中、短大生対象の求人数の減少が全国的に見られ、四年制大学生のみを求人する企業も増加している（平成19年度私立短期大学卒業生の卒業後の状況調査報告書より）。さらに、企業の採用スケジュールの早期化が顕著になっており、高校を卒業して間もない時期に大学3年生と同じ土俵で試験を受けざるをえない。短期大学のような二年間という短い在学期間では学生の就職試験対策が間に合わない事態となっており、短期大学生をめぐる就職状況は年々厳しさを増している。こうした就職状況を踏まえ、短期大学ではさまざまな就職支援の取り組みを行なっている。

企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための力を意識的に育成していくことが今まで以上に重要になっているとして、経済産業省では2006年から、「社会人基礎力」の育成を提唱している。これは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」であるとしている¹⁾。平成18年に経済産業省が行なった「社会人基礎力に関する緊急調査」によると、93.4%の企業が新卒社員の採用プロセスや入社後の人材育成において社会人基礎力を重視していることがわかる。そのため、各短期大学では、企業が求めているにも関わらず学生にとって弱みとなっている力を育成することに取り組んでいる。企業が求める人材像は、東証一部上場企業においては「前に踏み出す力」を、中堅・中小企業においては「チームで働く力」を重視する企業が多く見られるが、学生にとっては前に踏み出す力に自信が持てないという結果が出ている（みんなの就職株式会社「社会人基礎力に関するアンケート」2006年3月実施）。また、短大入学後数カ月で就職活動を行わなければならない、そのため就職意識

がなかなか芽生えないことから、職業理解や自己分析についても力を入れている。

◆上田女子短期大学における進路指導の現状

本学総合文化学科では、入学2ヶ月後に初めての就職セミナーを行なっている。後期から毎週開催される正規カリキュラムである就職セミナーの前段階として3日間に渡って行なうもので、コミュニケーションワークやビジネスマナー（身嗜み）、敬語の遣い方などのブラッシュアップセミナーと、実際に企業を訪問し職場を見学する事業所見学会を実施している。1年次後期からの就職セミナーでは、履歴書の書き方や面接対策、一般常識・SPI対策など、就職活動に必須とされる内容の講義を行なっている。

一般的な職業に就きたいと考えている学生の場合、この就職セミナーが職業的社会化に影響を与え、職業レディネスやコンピテンスが養われるものと思われる。

本学においては、昨今の就職難に対応すべく社会人基礎力の涵養に力を注いでいるが、その結果、社会化についていられない学生が就職活動から脱落していくケースが見受けられ、スムーズに就職活動が行える学生との二極化が進んだと感じている。学生へのインタビューでも、「なんか、今大変だからこうしなさい、みたいなふうにおおられて不安になるとか言いますよね、みんな」や、「不安をおおるような、早くしないとだめだよとか、就職活動まだやってないのとか、あおり立てられると、ああもう！みたいな感じになりますよね」という発言があるのだが、就職セミナーに参加したことにより逆に不安が生じるため欠席するようになり、就職活動が思うようにいかない様子が窺える。一方で、就職セミナーの講義内容から自分の職業意識に基づいて価値を見出し内面化できている学生は、速やかに就職活動を開始し早い段階で内定を獲得している。

専門職を目指す学生は就職セミナーに対しては真摯に取り組んでいるケースが多く、セミナーから得られる価値を内面化し就職活動も積極的に行なっている。しかし、短期大学生に対する専門職への求人が非常に少なく、総合文化学科の多くの学生が目指す図書館司書やブライダル専門職も例外ではない。そうした状況が職業意識や専門職への社会化に影響を及ぼしていると考えられる。その結果、就職活動を始めてから早い段階で失望し挫折してしまうというのが現状である。

第2節 専門職教育の現状

(1) 司書課程

1. 概要

本学の司書課程は1987年に開設され、多くの有資格者を輩出している。2010年からは専門科目に組み入れられ、「図書館司書フィールド」が新設された。受講者は1学年につき、20名から30名の学生が受講している。総合文化学科の中でもブラダイルとともに人気のあるフィールド・資格である。教育目標は「現場ですぐに活躍できる司書の養成」である。図書館実習、図書館ボランティアの重視、実践力と幅広い教養をもつ司書の養成に努めている。

2. 就職指導

全国的に見ても正規の専門職募集が少ないことから、就職は難しいというのが一般的な常識である。しかし毎年2から4名程度の学生が図書館へ就職している。ほとんどが公共図書館、学校図書館の嘱託職員、臨時職員の求人である。

求人情報が公開される時期が年度末に集中するため、司書課程学生の多くが図書館からの求人情報を待たずに一般企業から内定を獲得してしまうという問題もある。

学生への指導については、以下の3つの選択肢を提示している。①公務員試験を受け、図書館への異動発令を待つ。②臨時職で就職し、正規職へのチャンスをうかがう。③一般企業に就職し、求人があったらチャレンジする。

3. 課題

また、平成24年度からは図書館法施行規則が改正され、新カリキュラムに移行する。施行規則上20単位から24単位と増加する。内容もより高度になっており、教育面での改善が求められている。

総合文化学科の中でも司書課程の学生は比較的学力が安定しているが、新カリキュラムに短期大学生が対応できるのかは未知数である。

(2) ブライダル

ブライダル専門職に就こうとする場合、国家試験などの検定試験に合格し免許を取得するなど、資格は必要とされていない。そのため、ブライダル専門職についての知

識や技術を習得していなくても、求人があり就職試験に合格しさえすればその職に就くことができる。しかし、昨今、ブライダル専門職への希望者が増加する中、専門的知識を習得するためのカリキュラムを提供し、検定試験制度を整備している協会などが設立され、それらのカリキュラムを採用してブライダルコーディネーター²⁾に関する資格取得を支援する短期大学や専門学校が増加している。

検定試験を実施している機関はいくつかあるが、例えば「日本ブライダル事業振興協会（BIA）」（以下BIA）では、会員となっている専門学校や短期大学に対して「アシスタントブライダルコーディネーター（ABC）検定試験」（以下ABC検定）を実施する資格を与えているが、会員の数は全国で専門学校108校、短期大学では20校（大学1校を含む）に及んでいる。さらに、学校教育法の定めのないブライダルコーディネーター養成校として10校が指定校に認定され、「イントロダクションブライダルコーディネーター（IBC）検定試験」を実施している。本学もBIAの会員となり、ABC検定を実施しており、平成22年度の合格率は96%で、非常に優秀な成績を取めている。

ブライダルコーディネーターになるには、専門結婚式場やゲストハウス、ホテルの婚礼部門などへの就職を果たさなければならない。ホテルへの就職は、必ずしも婚礼部門に配属されないため、専門知識を習得している必要はないが、代わりに基礎学力や社会人基礎力、外国語の習得が必須となる。そのため、専門学校や短期大学よりも四年制大学の学生の方が有利といえる。専門結婚式場やゲストハウスへの就職も、資格取得が受験資格にはなっていないが、就職活動において四年制大学生と競争するには資格を取得した方が有利となる。

また、婚礼にかかる費用は高額であり、婚礼の打ち合わせや施行を通してさまざまな年齢層の人々とのコミュニケーションが必要であるため、専門学校や短期大学の学生の就職を困難にしていると思われる。

このような事情から、専門学校や短期大学では資格取得を可能にし、ブライダルコーディネーターへの就職の足掛かりとしている。

しかしながら短期大学は、基礎学力や幅広い教養を学び、専門性を身につけるための高等教育機関であるため、職業教育が柱となっている専門学校に比べ、職業教育に割り当てられる時間が少ないのが現状である。

ブライダルコーディネーターを目指すための検定試験合格に必要な科目は充実しているが、教会や婚礼衣装など婚礼業務の実技を学ぶための設備は不十分であることも課題のひとつと言える。それを克服すべく、リアリティのある現場を少しでも体験できるようにするために、学外の婚礼施設に依頼して見学したり、インターンシップを行ったりしている。

先にも述べた通り、就職が難しい分野であるため、学生への指導としては次のようなことを提示している。学生時に婚礼施設でのアルバイトを行ない、卒業後の正社員への採用チャンスを窺うという方法や、ビジネスマナーを既に身につけている人材の中途採用が多い業界であるため、ABC検定で資格を取得し、一般企業への就職をした後、求人があったらチャレンジするという方法である。

短期大学では一般教養を身につけ、学力を向上させることに力を入れていることから、専門職への就職以外の道も用意されていることで、卒業後の進路を担保している。

第3節 職業的社会化

職業的社会化について、山村、天野は次のように定義している。「職業に従事する上で必要とされる知識や技術を取得し、それぞれの地位に伴う役割を遂行するために制度化された行動様式や価値を内面化していく過程である。その結果、職業をもつ社会の成員としての自我が確立していく。その自我は自らの能力を発揮し、社会的是認を獲得しながら、自己実現に努める。この過程で自我は職業上のアイデンティティを形成する。」⁹⁾

つまりそれぞれの職業の知識や技能を身につけるとともに、職業上の地位に附属する価値や行動を自分のものとして内面化していくプロセスである。それ同時に社会の構成員としての自我が確立して、社会からの認知を得て、自己の成長を促して行く。

この自我の確立を「職業上のアイデンティティ」、「職業的同一性」ともいう。「自分はどのような人間か」、「自分にとって仕事とはにか」、「仕事を通じて社会にどのように関わりたいのか」などの主体的な意識をいう。

この定義に沿って考えると、職業的社会化は職業に就く前の段階からその職業生活を終えるまで続いて行く。

この論考は職業を意識し始めた時期からそれが具体化していくプロセスを追跡調査する。

今回の論考に近い論文は宮本の「本学学生の職業的同一性」である。短大の幼児教育学科入学時の心理的状況と入学時から2年時に至る職業的同一性の変化を把握し考察する研究をまとめている。⁴⁾宮本は結論として、「①職業選択についての心理的準備状態は決して低くない。②SCTの平均点は入学当初より1学年末に低くなる。実習の経験が保育者としての適性の疑問・能力不足の自覚・努力の方向性・方略性の混乱をもたらしている。」とまとめている。

宮本の研究から得られた示唆は職種と専門教育の違いにより、支援のタイミングと内容が大きく異なるということである。司書とプライダル専門職の比較研究でも想定される結論である。

第4節 研究の意義と目的

短期大学生の職業意識を研究している論文は多い。上記の宮本の研究もそうである。その範囲も看護、保育、教育などの専門職の他、ビジネス系の一般職を対象とした研究など多岐にわたる。また対象とする概念も「職業的社会化」「職業的同一性」「キャリア自律」など広い視野で研究が行われている。研究方法は量的な研究が多い反面、学生個々のケースを深く追求する質的研究は数少ない。特に職業意識の変遷は個々の事例を深く追求することでそのプロセスと構造が理解されると考えている。そこでこの研究では看護学生を対象とする質的研究を実施した宮脇らの研究方法⁵⁾を参考にす。学生に協力してもらい、インタビュー調査とジャーナル記入を定期的に行い、質的なデータを収集する。これをGTAによって分析する。そこから得られたデータから概念を抽出する。最終的な到達点としては、学生に対してどのようなタイミングでどのような支援を行うことが適当かを明らかにすることである。

第2章 研究の方法と調査の概要

第1節 GTAについて

グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を採用した。GTAとは、データに

密着した分析から概念、理論を生成する定性的な研究方法である。社会学者のグレーザーとスト劳斯が開発をした¹⁾。GTAはゼロの状態から収集されたデータを基本にして理論を構築するため、未開拓の分野を研究したり、特定の領域についての理論を構築したりすることに最適である。

特徴として①あらかじめ特定の理論に依拠するのではなく、データに即した理論の構築を行うこと。②継続的にデータの収集と分析を行うこと。③データを質的に分析する④あらゆる記述的なデータを対象とすることができる。⑤特定の分野についての理論構築に適している。

この研究ではインタビューデータとジャーナルを分析対象とし、1年間継続的にデータ収集と分析を実施する。

第2節 調査の概要

(1) 司書 (担当: 木内公一郎)

図書館司書課程を履修する1年生4名に対して、半構造化インタビューを実施した。

(インタビュー実施: 2011年3月)

インタビュー時間は一人につき、30分から1時間以内である。

※被インタビュー学生の属性

4人の学生はインタビューを実施した時点で1年生春季休暇中の3月である。2年に進級する直前ということになる。すでに40単位前後を取得している。図書館司書科目はこの時点で以下の科目を取得している。

図書館概論、図書館サービス論、資料組織概説I・II、資料組織演習I、図書館経営論、情報機器論等。また4名の内3名は教職課程と学校図書館司書教諭課程も並行して履修している。

また、インターンシップ(一般企業も含む)、図書館実習(学外・本学附属図書館)のうち、必ずひとつ以上を履修している。

学生の選定条件は2点である。第1条件は「多くを話してくれる」ことである。つまり自分の思考や感情を豊かに表現できることである。これについては普段の授業中の様子や短大生活の様子から判断し選抜した。2番目の条件は「図書館」「図書館情

報学」に関心が高いと認められる学生を選んだ。「関心の高さ」は授業での積極的な参加態度で判断した。

(2) プライダグ (担当：増田榮美)

インタビュアーは研究者、インタビュイーは短期大学の観光・プライダグフィールドを専攻している1年生で、研究の趣旨を理解し、入学1年後のインタビューの他、ジャーナルの提出、2年生夏休みのインタビューなど研究の協力で同意が得られた4人である。

第1回目の調査は、1年次春休み期間中の平成23年2月～3月にかけて4人の学生にインタビューを行なった。

学生Aは平成23年3月16日午後2時から50分間、学生Bは3月16日午前10時30分から1時間、学生Cは3月16日午後1時から55分間、学生Aは2月28日午後3時から1時間、それぞれ1人ずつ、研究者の研究室にてインタビューを実施した。学生には、研究計画や自由意思の尊重など、口頭と書面にて十分に説明した。特に、いつでも辞退が可能であること、協力内容が教育上に影響することは一切ないことなど、倫理的な配慮を行なった。

インタビューの内容は録音することに同意を得て、その後逐語テープ起こしを行ない、本研究の質的データとした。学生のプライバシー保護のため、氏名の明記は避け、アルファベットを用いることとし、内容については希望により削除を行なっている。

インタビュイーを選んだ条件は、第1に「素直に話してくれる」ことである。自分の感情や思考を飾らず素直に話せることが効果的であるという理由からである。第2に、プライダグ関連科目を受講していることは当然であるが、さらに、プライダグ産業でのインターンシップを経験していることである。そして、第3に「関心の高さ」である。これらの条件については、授業や短大生活の様子から判断した。

第3章 インタビュー分析

第1節 司書課程学生の職業的社会化

この節では動機、司書の仕事のイメージ、変化の契機、その他の視点からデータを整理し、最後にまとめを行う。

(1) 動機

「自分が、本、好きだったのが一番の理由で、次には、司書課程って興味があったというか、どんなことをしているのかが興味をひかれたので、せっかくあるんだったら、この際だし、勉強してむだになることはないので、できるものはどんどんやっっていこうと思って、軽い感じで。」(動機)

「えっと、小学校の時から、小学校以前、本当に小さいころから本が好きで、で、小学校の時に、図書館の司書やっていた先生がすごい先生で、毎日図書館通うのが好きで、あと、なんだ、いろんな本にあって、あと、家族も本が大好きだったので、しょっちゅう図書館に行ったり、本とかかわるのがものすごく多かったので、やっぱり本とかかわる仕事がしたいなっていうのと、あと、もっと自分が今まで読んできた本を他人に教えて薦めてみたりするっていうのもいいなと思って、司書を選びました。」(動機)

「高校の司書の先生が3年間同じだったんですけど、なんか、すごいしゃべりやすく、1年生の時に行った時から結構、なんかこう、フレンドリーな感じでしゃべってきてくれて、そうやってしゃべっていくうちに、なんか、読みたい本を図書館の中で見つけられなくて、なんかお薦めの本ないですか、って聞いた時に、薦めてくれた本があって、それが多分自分だったら表紙とかで結構選ぶんですけど、選ばない表紙で、だから薦めてもらわなかったらきっと読まなかった本だなと思ったら、そういうふうに薦めてみたいというか、したくなって、なりたいなと思いました。」(動機)

「えっと読書が好きで、学校図書館をいっぱい利用してて、司書の先生といろいろ仲良くなって話す機会が多かったので、本にかかわる、直接書くっていうことは全然思ってもみなかったんで、できてる本をだれかに手渡すっていうのが魅力的だなと思って、司書に興味を持ちました。」(動機)

「具体的になってきたのは、中学校の2年生ぐらい。」(動機)

「小学校の時に、毎週ではなかったけど、高学年になっても図書館で授業でいた時には、最初に司書の先生が絵本を読み聞かせしてくれる時間があったから。」(動機)

学校図書館の先生、特に高校の学校司書との関わりにおける体験が動機を支えている。司書という仕事を考え始めたのは4名とも異なっている。選択動機が資格取得であったEさんは短大入学後という時期であるが、他3名は短大入学前に意識しており、選択動機も具体的である。

看護職を希望する学生と比較してみると以下の点で相違が見られる。個人的体験、家族の体験だけでなく、マスコミ、テレビからの影響が見られることである。⁶⁾

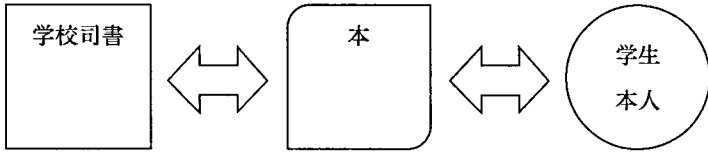
司書を希望する学生は本を媒介とした司書の先生との関わりが良いイメージを作り、動機に繋がっている。看護職を希望する学生に比べると社会的な影響が少ないとも言える。これは司書職がマスコミなどのメディアへの登場が極端に少ないことに起因する。

また、図1のように本を媒介とする学校司書との関係のなかで司書の仕事イメージしており、個人的な体験が影響を与えている。

表1 司書に対する関心

学 生	E	F	G	H
きっかけ	本が好き。	小学校の図書館の先生がよかった。本が好きだった。	読書が好き。学校図書館の先生と仲良くなって。	高校の司書の先生
時 期	短大入学後	小学校	中学2年	高校
イメージ	本をたくさん読める。本を勧める楽しさ。	本とかかわる	生徒が本を借りられるように準備してくれる人	高校の司書の先生イメージそのまま
選択動機	勉強できるものはやってみたい。	本を勧めてみたい	本を誰かに手渡したい	本を勧めてみたい

図1 本を媒介とする関係



(2) 司書の仕事のイメージ

「えっと、なんて言うんだろ、目に見える仕事っていうのは、もう本当に簡単に司書さんが立ってたり、散々見てきたんですけど、その裏でもやっぱりいろんな仕事があるんだなっていうので、また、その仕事っていうのがまた難しいんだなって思っ
て実感しました。」(司書の仕事・イメージ)

「入る前に、図書館司書っていうのは、結局その先生のイメージしかなくて、しかも学校じゃないですか。だから、こっちが休み時間とかに行っている時の先生しか見たことなかったから、そういう、なんだろう、蔵書整理とか、そういう業務的な部分ってあまり見ていなくて、図書館経営のそういうのとか授業でやっていて、こういうことも勉強するんだあ、って、なんか全部が不思議じゃないけど、びっくりっていう感じですね。」(司書のイメージと仕事)

「大分変わりましたね。私、初め、司書というのはどういうものか、そんなに深い理解があったわけでもないですし、かわりがあると思ったら学校しかなかったので、あまりなかったんですよね。やっぱり聞いていく中で、正直なところ、ちょっとなんだろう、正直に言っちゃうと、地味な作業が多くて、それに耐えられる集中力が必要なんだなというのは、強い印象を受けました。同じこととか、運動は全然ないわけですし、身体はあまり動かさないで、事務的な感じですか。でも、そうですね、それがちょっと印象の深かったところというか。」(司書のイメージと仕事)

「準備もするけど、手伝いもするし、案内役にもなるし、なんかいろいろお手伝いしてくれる人。」(司書のイメージと仕事)

4名の学生もいずれも司書という仕事に対して、深い認識があったわけではなく、指導してもらった学校司書の一部の業務から想起したイメージをそのまま持って入学して来ている。

それが入学後の授業から業務の多様性に気づくというプロセスを辿っている。

4名のうち学生Eさんが「地味な作業が多くて、それに耐えられる集中力が必要なんだというのは、強い印象を受けました。」という発言をしている以外は散漫な表現にとどまっている。これは授業についていだけで精一杯であり、学んだことを咀嚼し、自らの知識としていないことの表れである。Eさん以外の3名は教職課程も並行して履修しており、学びの量の多さから振り返る時間と余裕がなかったのであろうと推測される。

(3) 変化の契機

「やっぱ授業を受け始めて専門の教科書とか読み出してから。」(変化の契機)

「受けてる授業はみんな、実際学んでみると知らなかったことが多すぎて、どれも新鮮だなんて思って。なんか、どれも、知っている仕事の方が少なかったっていうのに驚きました。」(変化の契機)

「印象深かったことか。そうですね。なんだろう。特に印象深いのか。割とみんな印象深いと言ったら印象深いんですけどね。なんだろうな。」(変化の契機)

「割と難しいんですよ。それで私、ついていくので結構いっぱいいっぱいなので。なんだろうな、印象深いか。難しいというのも印象深いと言えば、深いんですけど。」(変化の契機)

多様で多くの科目を学習するなかで司書業務の多様性に気づきつつあると言える。これは多数の科目、その上多様な科目を必修で履修しなければならない。これらについていだけ精一杯の様子が見て取れる。また影響与えているのはインターンシップや実習ではなく授業であることも新たな発見であった。

(4) その他

進路セミナーに関しては4名全員が「役に立っている」ということである。具体的な項目としては履歴書の書き方、面接指導、合同企業説明会が上がっている。「役に立ってます。やっぱり、この間、あたしとしては、就職活動とか一步踏み出すのにちょっと戸惑っちゃって、なかなか踏み出せないんですけど。あの、実際、ここで、短大で合説を開いてくださったりして背中を押してもらったんで、行きやすい。あの次からも、この間も一回行ってきたんですけど、あの、なんて言うんだ、行きたくないな、から、行ってみようかなってなったり。あと、企業側に連絡取る時も、敬語の使い方とかでものすごい役に立ったりしています。」このように自分で積極的に活動できるようになったというコメントが多かった。

(5) まとめ

選択動機は単純であるが「本を勧めてみたい」という具体的なものが多かった。職業的社会化という観点からすると評価できると思われる。またFさん、Gさん、Hさんは短大入学前に一定期間、本、図書館、学校司書と関わり、意識を具体化させてきた。Eさんも高校時代に図書委員を経験している。ただし、社会貢献意識は看護職に比べるとやや低い。なぜならば、本を勧めることが相手にどのような影響を与えるのかという認識がまだ伴っていないからである。自分の行為によって社会にどのような影響があるのかをより具体的に認識できれば社会化が進化したと言えるであろう。また本と学校司書中心の関係に表れているように社会関係が狭く、広がりがなくともある程度共通して言えることである。

また、入学後は学習に余裕がなく、知識があまり整理されていない。これに対しては教育面での時間的な配慮と振り返りの時間を設けることが今後の課題である。

第2節 ブライダル産業専門職への社会化

ブライダル産業には様々な業種があるが、高校生がブライダル産業の専門職を選択する場合、ブライダルコーディネーターを目指しているか、漠然と「ブライダル」と考えているケースが多い。結婚式に携わる職業への知識が乏しく、ブライダルコーディネーター以外の仕事を知らないことが理由の一つと考えられる。また、ブライダルコー

ディネーターについては仕事をしている姿を目にする機会もあることから、ブライダル産業の専門職の中で最も身近に感じ、職業として意識しやすいのがブライダルコーディネーターなのである。

このような環境の中、どのような影響を受けてブライダル専門職を選択し、職業的
社会化を遂げていくのかを、学生へのインタビューから明らかにする。

1. 大学入学以前の職業への社会化

(1) ブライダルコーディネーターを選択した動機・きっかけ

ブライダル専門職を考え始めたのは、最も早くきっかけが訪れた人で小学生であるが、この学生が職業として意識するのは高校3年生であるため、4人ともほぼ同じ時期と言っていいであろう。1人が中学3年生、他は高校生、あるいは大検取得で進路選択を迫られる時期であった。選択するきっかけは、親類の結婚式参列によるブライダル専門職者との関わり、婚礼会場でのアルバイトによる個人的体験と、友人家族のブライダル専門職者や高校進路担当教員からの影響を受けていた。

共通点として、接客業への関心が高く、その進路希望の延長線上にブライダル専門職を考えている点が挙げられる。また、美容やファッション（アパレル）への関心度が高いのも注目すべき点である（表2参照）。学生Bが『女の人が輝くところが好きなんですよね。だから、美容とかも、喜んでもらえるというか、みんなきれいになるじゃないですか。なんかそういう仕事をしてたらこっちまで嬉しいし、だから、ブライダルもみんなきれいになるからいいなと思ったんです』と述べているように、女性が美しくなることへの関心が高いため、婚礼においては美しく着飾った花嫁が幸福感に満ち溢れていることから結婚式に携わりたいという漠然としたイメージが浮かび、ブライダル専門職に憧れて職業として選択していると考えられる。

表2 ブライダル専門職を意識した時期

学 生	A	B	C	D
きっかけ	親戚の結婚式参列	伯父の結婚式参列	進路担当教員からの紹介	婚礼会場でのアルバイト
	友人母親の仕事からの影響			
時期	小学生	中学3年生	高校3年生	高校中退後
当初関心のあった職業	アパレル(接客)	エステティシャン 美容師	接客業 (アルバイト経験により)	婚礼宴会場サービス (アルバイト経験により)
職業イメージ	「結婚式を創るのはすごい」「結婚式は感動的」「輝いている」「陰で支える」「やりがい」「恰好いい」			
選択動機	人と接する仕事に就きたい・人を笑顔にできる・人を幸せにできる・楽しく明るい仕事である			

(2) 短期大学を選択した理由

ブライダル専門職を目指す場合、短期大学への進学の外、専門学校に進学するという選択肢も与えられる。ブライダル専門職に必要なとされる基礎教育課程として専門学校ではなく短期大学を選択した理由は、「ブライダルの他に学びたい教科がある」「ブライダルを目指すなら基礎学力としての日本語もきちんと学びたい」「絶対ブライダルという強い意志がなかった」「就職先の選択の幅が広い」「ブライダルに興味はあったが仕事に就きたいとまでは考えていなかった」等であった。

専門学校は職業教育を主としているため、職業意識を高め専門分野の知識や実技を学ぶことに重きを置いており、途中で諦めたり挫折したりして方向転換すると就職が困難となる。就職意識は高くないが興味はある、という程度の職業意識しか持ち合わせていない学生の選択先としては短期大学が魅力的であるのだと推察される。このことは、学生Cの『すごい強い意志がなかったんで、専門(学校)までやっば行く自信がなくて。でも、そこでほんとに絶対なるって強い意志があれば、多分専門へ行ってたと思うんですけど。……やりたいことがはっきりしなくて専門行っても、絶対、興味なきやめちゃうじゃないですか。なんで、強い意志ないとだめだな、みたいな』や、学生Aの『進路選択に影響はあったけど、でも、将来ブライダルの仕事に就きたいとまでは思ってなくて、まだちょっと浅い感じで。専門学校で専門的にやるっていうことではなくって、そこまで就職、職業意識がなかったから。短大で広く、

いろんなことを勉強、ですね』という学生の言葉からも読み取れる。

一方で、ブライダル専門職への就職だけを目標にするのではなく、そのために必要な幅広い知識や技術を習得したいとも考えており、職業教育のみならず基礎学力向上や教養を身につけることを目標としているため短期大学への進学を決めている。学生Dは『婚礼会場のアルバイトしながら国語はやっぱり必要だなんて思ったんで、それも勉強したかったから。やっぱブライダルだけになっちゃうと、私の求めてたのとは違うみたいな感じで。この短大は日本語とか国語にすごい力が入って、選択の内容もすごく豊富だったから、もっとなんかこう、いろいろ学べるなどと思って、この短大にしたんです』と話している。また、学生Bも『短大に行けば、ブライダルの勉強もできるし、ブライダルだけじゃなくてほかのこともちゃんとやらなければいけないし。国語とかもあるじゃないですか。常識とかも身につけたかった』と述べていることから、学生は教養を身につけるには短期大学、職業教育は専門学校、というすみわけができてることが窺える。

2. 入学後1年間の授業やインターンシップなどの体験

入学後1年間で学生の社会化に影響を与えたものは、正規カリキュラムとして学内で行なっている授業やインターンシップ、課外活動としてサークル活動、アルバイトであった。

(1) 授業からの影響

ブライダル産業は、ホスピタリティ産業と言われ、1回の売上金額が高額であることや、消費者は一生に一度であるという想いが強く小さな失敗が取り返しのできないコンプレインにつながることもあるため、接客には高度な技術とコミュニケーション能力が求められる。そのため、授業では、基本的な結婚や結婚式に関わる知識の他に、ビジネスマナーや敬語の遣い方などを厳しく繰り返し講義している。また、目に見えている仕事の他に、厳しい裏方の仕事があり、華やかな部分は1～2割程度で、憧れだけでは務まらない旨も伝えている。その結果、夢や希望を打ち砕かれ、ブライダル専門職に対する意欲が減退している可能性があるのではないかと危惧していた。

しかし、専門科目の受講による挫折や失望、不安感などはなかった、と述べており、

専門職を目指す上で必要な専門科目を受講したことで、漠然としていたブライダル専門職について知識を深めることになったようである。

学生Dは『授業であんまり夢のないことばかり言っても、私本当に嫌になっちゃったみたいなの、そういうのはないです。ホテルの裏のほうも、ある程度知ってるというか、アルバイトで長く勤めてたから、もう夢は覚めてるので。それでもやっぱり感動する場面を見ると、そういう仕事に就きたいと思う』と話している。また、学生Bは『面白かったですよ。知らなかったことばかりじゃないですか……ブライダルは、本当にその日に絶対失敗を起しちゃいけないじゃないですか。でも、だから、大変だから嫌だなあ、とは思わなくて、失敗しちゃいけないくらい大切なところに携われるわけで、……魅力があると思います』と述べ、学生Aも『やっぱ、ああいう華やかな仕事には、本当に積み重ねが必要だから、こういうところから地道にやらなければなと思って』と述べていることから、授業を通して職業意識をさらに高めることにつながったと考えられる。

学生Dの『ブライダルはコーディネーターだけじゃないから、花屋さんとかっていうのも一つの手かななんて思ったりもしましたけど』という言葉から、専門的な知識を習得することで、ブライダル専門職への理解が進み、ブライダルコーディネーター以外の職業への関心が高まったことがわかる。また、学生Bの『お花、ドレスの他に、ほかの一般企業の販売系とかも見てますけど。勉強するうちに、人とのコミュニケーション能力が必要とか、人と接してお客さんに喜んでもらえるという、大きな枠組みに変わったということですかね。考え方は同じなんだけれども、職種の範囲が広がっているということですね』や、学生Aの『授業を受けて、コーディネーター以外にも職業がたくさんあって、メイクとかにも興味があったので。やっぱ、視野が広がった』という言葉から、授業で得た専門知識を内面化する課程で、ブライダル専門職以外の職業への視野を広げることにつながったと思われる。

(2) インターンシップからの影響

1年生の夏休みにインターンシップを行ない、ブライダル専門職を目指すほとんどの学生がブライダル産業での仕事を体験した。学生A,C,Dはゲストハウスで、Bはフーリストでそれぞれブライダルの仕事に携わった。

学生Dは『一番思ったのは、やっぱり（ブライダルの仕事）やりたいなっていうふうに思いましたね。披露宴のコーディネートを提案したりとか企画をして、お客さんに提示したりしたくなりましたね。だからやっぱりコーディネーターだなんて、自分でも思ったんですけどね、終わった後に』と述べているが、もともと婚礼会場でのアルバイトを経験していることもあり、イメージが崩れることなく自身の職業意識を再確認することができたようである。学生Bも『実際はものすごい重労働ですよ。そういうのを見た時も、お花屋さんって大変で、冷たいし、しんどいし、それでも嫌にはならなかったです。そんな裏があるから、こういう華やかな仕事ができるんじゃないですか』と述べており、職業体験によりさらに意識が高まって、ポジティブな思考につながったといえる。

一方で、学生Cは『授業でDVD見た時は、やっぱ夢あるし、あっぱいな、っていうのがもう率直な考えだったんですよ。けど、実際に、実践でインターンシップ行った時から、ちょっと変わりましたね。大変さをすごく身にしみて覚えて、そういう簡単なものではないみたい……インターンシップ終わって、実際に本当にやりたいのは、と思った時に、考えたらやっぱ花屋さんかなみたい』と述べていることから、授業を通して感じていた職業イメージとのギャップをネガティブに捉えていることがわかる。

学生Aは『インターンシップの中で向き不向きがあるっていうことがわかったっていうのは、すごい発見ですね。ためになりましたね』と話しており、職業へのイメージが変化したというより、自身の中でのネガティブショックを経験したようである。しかし、『ただ、ブライダル以外のことも知れたというか、仕事に対する気持ちっていうか、そういうのも学べたので。あと、サービス精神とか、お客様の対応とか、裏方でこういうふうになれば喜ばれるみたいな感じのものも学べたのでよかったです、行って』とも言っているように、実際にブライダル専門職の仕事を経験したことで、よりリアリティーを持って進路選択を行うことにつながったことがわかる。

実際に職場での仕事を体験したことで専門職に必要な知識や価値を内面化し、さらに就職意識を高めた学生もいたが、想像以上の厳しさや自分の無力さを思い知らされ挫折しそうになった学生もいた。いずれにしても、インターンシップを経験したこと

が進路選択の幅を広げることにつながったといえる。

(3) サークル活動・アルバイトなどの経験からの影響

ブライダル専門職を目指す学生はほとんどがブライダル研究会というサークル活動に参加している。この活動を通して、ブライダルに関わる知識の習得以外に職業選択への影響があった。

例えば、学生Dは『ブライダル研究サークルとして福祉施設のボランティアでブライダルショーやりましたよね。あの時、お年寄りと接している職員の方の笑顔を見て、やりがいありそうだな、と思って。私たちのショーでお年寄りが喜んでくれたら仕事として興味がわいて』と述べているが、このボランティアでの経験により、福祉関係の資格を取得するための授業も並行して受講することにしたようである。

学生Aも『学会祭のブライダルファッションショーを見て、やっぱブライダル研究サークルっていいなって思いました。ブライダル以外に服も興味があって、ファッションショー見て、ああ、服の仕事いいなって思って』と述べているのだが、実際に1年生の冬休みからアパレルのアルバイトを始めていて、アパレルへの就職も考えるようになったようである。

学生Cは『アルバイトで、お席までトレイをお持ちします、って言ってあげたりする……そういう心遣いが大切。なんかお客さんの目線になってよく考えてみれば、こうしてくれたほうが嬉しいとか、そういうことってあるじゃないですか。それを一番に気づいてあげられることが大事、みたいな。ホスピタリティだよって言われました』と、アルバイトでは接客という点で社会人として大切な価値を取り入れることができたと思われる。

学生Bも『ブライダル研究会のサークル活動の中でも、得られるものはあったですね。実際に自分たちで模擬挙式する時に企画とかみんなで出しあったりして、こんなことできるんだあ、みたいな……こんなにいろんな役割の人たちがいるんだということがわかる、みんなではじめてできる』と述べており、同じ専門職を目指す先輩たちとの交流や意見交換、協力して作り上げる企画などを通して強い仲間意識や連帯感を持つことになり、さらに、社会人として必要な他人への配慮を培うことにつながったと思われる。

ブライダル専門職を目指している学生は、高校生の時から、あるいは短大入学後にショップやファストフード店などの接客業をアルバイトとして選択しているケースが多いことは注目すべき点である。もともと人と接することが得意で、意図的に接客業を選択していることが窺える。直接ブライダルとは関係がない職種であっても、「おもてなし」「ホスピタリティ」「身だしなみ」「お客様第一」「笑顔」「コミュニケーション」などの共通点を見出し、その価値を自分に取り入れていると思われる。

(4) 就職活動による影響

短期大学の場合、入学後1年も経たないうちに就職活動の時期を迎える。ブライダル産業の職業理解がなされてないまま、また、専門職への就職を意識できないまま活動を行うことにより、その活動によって就職意識が変化することとなった。

学生Bはブライダルに関わる仕事としてジュエリーショップの説明会に参加し、その結果を『ジュエリー屋さんに行っただですよ、説明を聞きに……そういうのは合っていないんだわと思いましたけど』と話していたのだが、説明を聞いて初めて自分には不向きであるとの理解が深まったことになる。

学生Aも『就職活動を始めたころは、すごいいろんなところに足突っ込んでたんですよ。でも、就活の説明会とか行って、すごい興味持ってたか持たないかでどんどん絞っていったんです。それで、お客様と接する部分、あるいは、広い意味でのお客様に喜んでもらうという仕事としては、ブライダルもアパレルの接客の仕事も多分延長線にあるのかなって』というように、就職活動を始める前は職業理解が乏しかったが、活動を進めるに従って理解を深め、自己分析にもつながったと思われる。

学生Cは『就職面接会はちょっと考えが変わりました。ちょっと絞っちゃってたけど、ブライダルって。でも接客もっていう幅広く選べるみたいな感じで思ってたので、ためになりました』と話しており、職業意識が変化するとともに選択の幅が広がったことがわかる。

また、ブライダル専門職は就職難であり、新卒の採用を行っていない施設が多い。そのためブライダル専門職への就職を諦めたり、選択の幅を広げることにつながったと思われる。

学生Dの『ホテルは募集はしてるけれども、ブライダルコーディネーターを募集し

てるところってそうはないんですよね……夏休み前ぐらいまでいい目星の企業がなければ、ちょっと視野を広げて、接客とかって広げてみようかなとは思ってるんですけど』や、学生Bの『就活して、やっぱり少ないんだなあと思いました、求人。それがわかって、寂しい。収穫が少ないってことがわかりました』、学生Cの『取りあえずお花屋さんって絞っちゃうと、なかなか就職までつながるかっていったら、ちょっとわからないんで。ホスピタリティという根幹の部分が、プライダルではないところにも生かせるというふうに、幅広く考えるようになったってことですね』という言葉から、求人の少なさから職業選択の幅を広げざるをえない状況が窺える。

(5) 全体を通してのまとめ

1年次の学生は、入学前に抱いていたプライダル専門職への漠然とした憧れやイメージを、学内外の正規カリキュラムである授業やインターンシップ、課外活動としてのサークル活動やボランティア、アルバイト、就職活動などの経験を通して、徐々に具体的なものとして捉えられるようになってきている。職業への理解も進み、自分に向いている職業に修正し始めて現実を見据えた職業選択を行っており、社会人としての適応をはかりつつあると言える。しかしながら、1年間の専門科目だけでは、社会人としての基本的な価値や態度を取り入れるのが精一杯で、プライダル専門職に必要なより専門的な価値や態度を内面化する⁷⁾のは難しいのが現状である。そのため、就職活動を通して行なわれる自己分析や職業選択が最も職業への社会化に影響を及ぼしていることが示唆された。

第4章 結論と今後の展望

プライダルと司書という2つの専門職を目指す学生を比較してみると以下のような相違点が浮き彫りになった。

(1) プライダル

変化の契機となった事象については、プライダルではインターンシップであり、司書では正規授業の受講である。

プライダルの学生はすでに就職活動を始めており、アルバイトやボランティア活動も視野の拡大と社会化の進展をもたらしている。

ブライダルでは、授業等の座学で仕事の大変さが伝わりにくく、授業内容も難しいというよりは新鮮で楽しく感じるようである。

ところが、インターンシップでいざ現場に出てみると、仕事の難しさ、厳しさを身にしてみても感じ、価値や態度を取り入れるのではなく、諦めにつながっている。現場で働いているブライダルコーディネーターの仕事ぶりから、自分とはかけ離れた存在であるとの認識が生まれているようである。しかし、それらの仕事ぶりや身のこなしは、座学で身につけるものではなく、むしろ就職後の日々の仕事が社会化に影響を与え成長した結果なのだが、学生はそこまで深く思慮できないため、価値を内面化できずに諦めてしまうものと思われる。

ただ、ブライダルコーディネーターを諦めはするものの、同じブライダル産業の他の職種にも視野を広げて考えるようになってきている。このことから、今後はいかに授業を通して、仕事観を養わせるかが課題であろう。

もうひとつブライダルの専門学生に特徴的なのは、就職活動による視野の拡大である。就職活動により自己分析が進み、自分にとっての向き不向きが理解できるようになったのが理由の一つであるが、一方で、ブライダルコーディネーターの求人が少ないことによる就職難が影響して、視野を広げざるを得ないのも現状である。

今後は、厳しい就職活動にあっても諦めず、2年次後期末の検定試験を受験するモチベーションを維持できるようにサポートすることが必要であろう。

(2) 司書

司書の学生は正規の授業が視野の拡大をもたらしているものの、司書という仕事の価値や必要とされる態度への理解や内面化が具体的に進んでいない。

インターンシップや実習も影響を与えていると思われるが、授業の情報量が圧倒的に多く、知識の整理が追いついていない。司書の学生も進路セミナーを積極的に受講し、合同企業説明会に出席している。実際にとても役立っているようであり、視野の拡大と積極的な態度をもたらしている。そう意味では社会化が一部進んでいると言えるであろう。しかし、一連の活動から学んだことを司書という仕事の価値や態度と結びつけて内面化するにはまだ至っていない。

2年次以降は授業も実践的になり、複雑化する。また就職活動、教育実習も始まる

ので、その影響と変化を調査していきたい。

(3) 今後の展望

春から夏期休暇にかけて、就職活動も本格化すると思われる。また一部の学生は教育実習や図書館実習に参加する。そのタイミングを見計らって、ジャーナルの提出とインタビュー調査を実施する予定である。

また第2報以降はGTAを取り入れた研究を具体化させる予定である。

最後にインタビューに協力してくれた学生の皆さんに心より感謝します。(了)

【注釈】

- 1) 経済産業省ホームページより www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm
- 2) 日本ブライダル事業振興協会では、結婚式場やホテルの婚礼部門で婚礼の打ち合わせを行う専門職のことをブライダルコーディネーターと呼称している。施設によっては「ウェディングプランナー」や「ウェディングプロデューサー」など独自の呼び方をしているところもあるが、本稿では「ブライダルコーディネーター」に統一する。
- 3) 山村健、天野郁夫編「青年期の進路選択：高学歴時代の自立の条件」(有斐閣新書) 有斐閣、1980年 p88～90
- 4) 宮本一史. 本学学生の職業的同一性. 武蔵野短期大学研究紀要 第15号 (2001) p29-43
- 5) 宮脇美保子他. 4年生大学における看護学生の職業的社会化－1年次の学生を対象として(第1報). 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 第2巻1号(2006) pp.53-58
- 6) 宮脇美保子他. 4年制大学における看護学生の職業的社会化－1年次の学生を対象として(第1報). 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 第2巻1号(2006) pp53-58
- 7) 宮脇美保子他. (2006) pp53-58
- i) B.G.グレイザー, A.L.ストラウス. 後藤衛他訳. データ対話型理論の発見. 新曜社, 1996年